

## 木造家屋と超高層ビル

@Tokyo

わたしが初めて日本の地を踏んだのは、1973年の11月だった。その年の10月に第4次中東戦争が勃発、OPECが原油生産削減を決めて最初の「石油ショック」が起きている。東京に着いたわたしは、下北沢でアパートをみつめた。越冬のために石油ストーブを購入したのだが、その燃料と

なる灯油が手に入らなかった。店に行っても、「これまでのお得意さんだけに配達する」と言われ、売ってくれないのである。「狂乱物価」の見出しが、新聞紙面で連日躍っていたところだ。スーパーマーケットの棚から、洗剤やトイレットペーパーが消えた。売り惜しみ、買い溜めの結果だったらしい。それからしばらくしたら、

ある大手石油元売り会社の経営者が、「千載一遇のチャンス」と社内で檄を飛ばした、と報道された。

寒さが足元から這い上がってくるような東京の冬の夜を、すきま風が入り込む木造2階建てのアパートで、わたしは毛布にくるまり震えながら過ごした。

現在の姿からは想像もできないと思うが、当時の下北沢は、駅前に小さな商店街があり、それを抜けると、木造平屋建てか2階建ての家屋がずっと続くような町だった。いや、これは下北沢に限らずに、たとえば東京駅周辺、新宿駅周辺、渋谷駅周辺といった特別な地域を除外したら、東京23区内はどこでもそうだったと思う。

晴れた日に東京タワーに昇って見下ろすと、濃い灰色の瓦屋根が、まるで海面上に刻まれた小波のようだった。濃い灰色の屋根瓦が途切れた場所は、現在進行形でビルの建設工事が行なわれているか、それとも近い将来にビルの建設工

事を行なうために、すでに取り壊しが完了した空間である。このころの東京は、あらゆる場所で昼夜、突貫工事がなされていたように記憶している。

つてを頼り、東京大学でアルバイトの職をみつけた。日本の超高層ビルの先駆けとなった霞が関ビル<sup>けい</sup>の最上階で開かれる英会話教室での講師の仕事が、わたしの主な収入源だった。地上36階147メートルの高さで、霞が関ビルは、周囲を睥睨するように建っている。

その英会話教室の生徒たちは、これから海外に派遣される予定の、大企業のエリート職員と霞ヶ関の若手官僚たちがほとんどだった。休憩時間には、コーヒー・カップを片手に、スモッグでくすむ東京の街を見下ろしながら、生徒たちと雑談を交わす。

「このビルは、5年前に建てられたので、もう古いですよ」

生徒の一人がなにげなく言った言葉を、わたしは今でも忘れない。☺